

戦姫絶唱シンフォギア ドラグーン

ルオン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

風都には3人の仮面ライダーがいた

1人は2人で1人の仮面ライダーダブル

1人は全てを振り切る仮面ライダーアクセル

そして最後の1人は、罪を断罪する仮面ライダードラグーン

風都に起きる怪現象は、3人の仮面ライダーによつて守られていた

ドラグーンこと海崎 真護は、怪現象の元凶であるドーパントを追つて倒した帰り、

ノイズと戦うシンフォギア装者たちと遭遇する

これは、本来なら交わることがなかつたはずの戦士たちが、未来に向かつて驚異に立

ち向かっていく物語である

目次

E p i s o d e 0 : 現れる仮面の戦士

1

E p i s o d e 1 : S の平和な日常

8

E p i S o d e 0 : 現れる仮面の戦士

ノイズ

それは、人類共通の脅威となつてゐる特異災害。

ノイズは、空間から滲み出るかのように出現し、人に向かつて襲いかかり、自身ごと人を炭素へと転換する特性を持つていた。

なお、ノイズは一定時間が経過すると、ノイズ自身が炭素化して消滅する。

それまでノイズは、人を狙つて襲い続ける。

そのノイズに唯一対抗できるシステムがあつた。

その名は【シンフォギア】

シンフォギアは、世界各地の伝説に登場する、超古代の異端技術の結晶と呼ばれる【聖遺物】の欠片から作られたシステムである。

シンフォギアは力を引き出せる者、適合者こと【装者】だけにしか起動させることはできないため、使用できる者は数少ない。

適合者の歌に、アウフヴアツヘン波形にシンフォギアは反応し、適合者の鎧として装備される。

また、素質を持つても、シンフォギアを起動できない者もいる。そういった者たちには、【LINKER】と呼ばれる、適合率を強制的に上げる物を使ってシンフォギアを開発する。

その適合者であり、「ツヴァイウイング」と呼ばれる音楽ユニットをしている、シンフォギア【ガングニール】の装者である天羽奏（あもうかなで）と、シンフォギア【天羽々斬】の装者である風鳴翼（かざなりつばさ）は、日夜戦っていた。

そして今日も、2人はノイズと戦っていた。

「オラアアアアアア！」

「ハアアアアアアアア！」

『『?·∞\$≡?·℃β≡\$』』

奏は槍の、翼は刀の【アームドギア】と呼ばれる武装で、廃工場に現れたノイズと戦つていた。

だがノイズは、お構いなしに次々と出てくる。

「チキシヨー!! 数が多くすぎる!!」

「くつ!! このままでは負ける!!」

あまりの数に苦戦を強いられる2人。

その時だつた。

『\$?・∞℃*?・□?・#!?』

「つ!? な、なんだ!?」

「ノイズが……炭素化した!?」
奏と翼に迫っていたノイズの一体が、突然炭素化したのだ。他のノイズも次々と炭素化していく。

突然のこと驚く奏と翼。すると、2人の後ろからバイクのエンジン音が聞こえてくる。2人が振り返ると、バイクに乗った人物が、銃のような物を手に走ってきていた。

「なっ!?」

「何故人が!?」

謎の人物の出現に驚きを隠せない奏と翼。

するとバイクに乗った謎の人物は、奏と翼の前にバイクを停止する。

「まさか、町から逃げ出したドーパントを追つてきたら、ノイズに遭遇するなんてな」

そう言うと、謎の人物はバイクからおりて懐から何かを取り出す。

その謎の人物へ、奏と翼が声をかける。

「おいあんた、早く逃げろ!!」

「ここは危険よ!!」

「心配無用だよ、こういった奴等とは戯い慣れてるからさ」

『ドラグーン』

「変身!!」

『ドラグーン』

謎の人物は取り出した物を腰に装着し、後から取り出したUSBメモリのようなメモリを腰に装着した物に装填し、右に傾ける。

すると謎の人物の体が、白い炎に包まれる。やがて炎が消えると、謎の人物の姿は、白がベースの所々に黒いラインが入ったライダースーツに白いアーマーをつけ、白い仮面に赤い複眼をした仮面の戦士へと変わっていた。

「な、なんだ!?」

「仮面の……戦士!？」

「さあて、あんまり長居してられないんでね、始めさせてもらうぜ」

そう言つた仮面の戦士は、左腰にさげていたサーベルを手にする。
すると、1体のノイズが仮面の戦士へ襲いかかる。

だが

「ふん!!」

「C?♀?T?∞?X!?’

「ツ!ノイズを!?’

「倒した!?」

仮面の戦士はノイズを斬り裂いた。

それを見ていた奏と翼は、予想外の出来事で困惑している。2人がそんな反応をしているとはいざ知らず、仮面の戦士は次々とノイズを斬り裂いていく。

「凄い……」

「あんなにいたノイズを、数秒足らずで倒してる」

「ふう…………このくらい減らせばいけるか」

《ドラグーン マキシマムドライブ!!》

「ドランブレイザー!!」

『『♀』℃? \$ #〒?!?』』

仮面の戦士はサーベルへ、腰に着いている藻のに装填したメモリを引き抜いてから装填し、それと同時に刃に炎が纏い、そのサーベルで残りのノイズを撃退した。

「マジかよ!!」

「あんなにいたノイズを、たつた一撃で!?」

仮面の戦士による一撃で、大量に残っていたノイズが全滅したことに驚きを隠せない奏と翼。

すると仮面の戦士、サーベルを腰にさげてバイクへまたがる。それを見た奏と翼は、

逃がさないよう取り囲む。

「悪いが、あんたには聞きたいことがあんだ」

「悪いけど、ついてきてもらうわ」

「美人2人からのお誘いは嬉しいが、先約がいるんでね。今日は帰らせてもらうよ」

『テレポートマキシマムドライブ』

断つた仮面の戦士は、別なUSBメモリを取り出し。バイクへ差し込むと、バイクごとその場から消えた。

「き、消えた!?」

「マジかよ!？」

突然のことに驚いた奏と翼。2人は周辺をくまなく探したが、仮面の戦士は見つからなかつた。

諦めた2人は、シンフォギアを解除し、近くに停めていたバイクに乗つてその場を後にする。

その同時刻、巨大な風車がついたタワーのある街に、先程まで廃工場にいた仮面の戦士が、タワーを見上げていた。

「まさか、奏と翼がノイズと戦う謎の戦士だつたなんてな〜」

そう言い、仮面の戦士は見上げるのをやめ、バイクのハンドルを握る。

「さあて、事務所に戻るか」

そう言つた仮面の戦士——【仮面ライダードラグーン】

こと海崎

かいざき

真護

しんご

は変身を解

除し、目的地へと向かう。

そしてこの日から、真護とシンフォギア装者たちの、運命が交差するの日となつた。

E p i S o d e 1 : S の平和な日常

風都

そこは、様々な形をした風車が数多くあり、風がよく吹く街である。街のシンボルでもちろん、街のあちこちに設置されている風車は、ほとんど回っている。

その街に住む青年、仮面ライダードラグーンこと海崎 真護は、彼の師の2人、左 翔太郎しようたろうと園崎来人そのざきらいとことフイリップ翔太郎の師匠の娘である照井亜樹子てるいあきこ、旧姓鳴海亜樹子なるみあきこ、ひだりが所長を務める、鳴海探偵事務所の一員として、働いている。

そんな彼は今

「ミツク♪」

「にや～？」

「暇だな～」

「みや～」

鳴海探偵事務所にたまに帰つてくるマスコット（？）的存在の猫ことミツクの頭を撫でながら、ソファに横になつていた。

すると、鳴海探偵事務所の一員で、「ハイドープ事件」と呼ばれる事件の中心人物であつた、翔太郎の恋人、である左ときめが、買い物から戻ってきた。

「ただいま！」

「おかえり、ときめさん」

「にや〜」

「ただいま、真護、ミック♪あれ？ 翔太郎たちは？」

「翔太郎さんは、ウオツチヤマンから気になる話があると聞いて聞きに、亜樹子さんは竜さんにお弁当を届けに、フイリップさんは研究室で調べ物です」

「そつか」

そう言つたときめは、部屋の奥に置いてある冷蔵庫へ、買つてきた飲み物や食材を入れ始める。

するとその時

「バン!!」

「真護いるか〜!!」

「にやつ!?」

「ツ!? (ビクツ)」

「……実か」

1人の女性——六条実ろくじょうみのりが、鳴海探偵事務所のドアを勢いよく開けて入ってきた。

真護の腹の上で寝ていたミックは、ピツクリして真護の腹の上から飛び退き、ときめは手に持っていた飲み物を落としそうになつた。

真護はタメ息をつきながらソファから起き上がる。

「なんの用だ実」

「真護!! うちの学園の教師に「断る」何でだよ!?」

「前にも言つたろ? 俺は教師向きじゃないし、お前の学園は女子校だろうが。アレを教えるのに差し支えるだろ」

「えく? でもお」

「あんまりしつこいと怒るぞ?」

「うく……分かつたよくじやあまた」

そう言つて実は、ドアを開けて探偵事務所から出ていく。

「まつたく、毎度毎度諦めずによく来るよ」

「それほど真護を信頼してくるんでしょ?」

「うななんですかねく? そんじや俺、少しドライブしてきます」

「うん、気をつけて」

「はい」

真護はそう言つて、事務所を出ていき、愛車である【ドランボイルダ】へ乗り、アクセルを回して走り出す。

しばらくして、真護は喫茶店の前にとまり、喫茶店の中へと入つていく。

—カラソカラソ—

「どうもマスター」

「やあ真護くん、いらっしゃい♪」

「ここにちは真護くん♪」

「ここにちはリリイさん」

喫茶店に入つた真護を迎えたのは、喫茶店こと【喫茶・白銀】のマスターと、孫娘のリリイ白銀である。

彼らは以前、真護の師匠である翔太郎とフイリップ、そして亜樹子の夫で警察官である照井竜てるいりゆうに助けられた1人である

真護はドランボイルダーに乗つてドライブすると、必ず立ち寄り、コーヒーを飲む。

今日もコーヒーを頼んだ真護は、席についてマスターがいれてくれたコーヒーを飲

む。これが彼の過ごす、依頼のない時の平和な日常である。

そしてこの日の翌日、彼の、探偵としての日常が始まるのであつた。
to
be
next
episode